

6月1日ゼミは開催します**伊勢神宮の創建Ⅲ 明治の宗教改革とアマテラスの復権**

—6月1日ゼミ紹介文：増田修作会員記—

伊勢神宮の創建Ⅰ、Ⅱにより神宮成立の歴史や祭神天照大神についての私見を述べてきた。しかし今日の天照大神の国家神、皇祖神としての位置づけはそうした古代の歴史だけでは解き明かせないほど重要なもので、明治の宗教改革が大きな影響を与えているものと考えざるを得ない。このため伊勢神宮の創建Ⅲとして明治の宗教改革とアマテラスの復権を取り上げることとした。

1. 「王政復古、祭政一致、天皇親祭、神仏分離」をめざす神祇官の復興

- ・慶応4年（1868年）2月、明治政府は神祇事務局を設置し、宗教政策の本格的な改革に乗り出した。明治新政府の政治基盤は極めて脆弱なもので、若年の天皇の下で政府の権威を確立し、列強諸国に伍していくためには徳川封建政治に代わる新鮮な政治スローガンが必要な状況であった。このため政府は「天皇を中心とした中央集権的官僚制国家の建設」という目標を掲げ、神道本流平田篤胤直系の「平田派」、石見国・津和野藩で後の神仏分離運動の先駆けとなる活動を主導した「津和野派」などの国学者を集結した神祇事務局に対して、「天皇の絶対優位性」を確立するための理論構築を求めた。

2. 祭神論争とアマテラスの復権

- ・神祇官の復興を神道復活の千載一遇の機会ととらえた神道各派は、それぞれの教義を主張して、祭神論争が繰り返され、これが宗教政策の迷走、混乱の要因ともなった。
- ・本居宣長の「顕幽論」は、神道各派の教義に大きな影響を与えた。『「顕」とは「現人の顕に行うこ

と』で、具体的には「朝廷の御政」のことであり「幽」とは「目に見えず・神の為し給う政」で、大国主が「幽事」を統治する。また世の中のことはみな神の御はからいによることであって、結局顕事も幽事に他ならない。顕事が幽事であるということは顕事を掌り治めず天皇の治も畢竟神の心、天照大神の心に出るものにほかならない。』

- ・祭神論争は、事あるごとに繰り返された。特に明治13年、大教院に代わって創設された神道布教の中心となる神道事務局に新築する神殿（皇太神宮遥拝殿、後の東京大神宮）に奉斎する祭神について起こった論争は、出雲大社と伊勢神宮が争ったものであるが、最終的に明治14年2月、全国各地の主要官司・教導職を集めた神道大会議が開かれ、太政大臣・三条実美によって表明された明治天皇の勅裁「宮中ニ被斎祭所神霊、天神地祇、賢所、歴代皇霊」によって大国主命などの出雲系の神々は排除され、賢所（天照大神）、歴代天皇霊、天神地祇を国家祭神とする「伊勢派」の勝利で決着した。

3. 明治宗教改革の核心＝神祇官祭祀から宮中祭祀への転換と「神宮・賢所一体化」

- ・天皇即位後始めての新嘗祭を大嘗祭とするのが古来のルールであるが、明治天皇の場合は大政奉還など政情の混乱から明治4年11月の斎行となった。この天皇一世一代の大祭の催行をひかえて神祇官は、アマテラスを皇祖神として親任する伊勢神宮への天皇親拝を実現し、さらに「祭政一致」「天皇親祭」へ向けて各所に散在していた諸神霊の宮中遷座を実行し、残された課題である「同床共殿」、「神宮・賢所一体化」に取り組むこととなった。

4. 宗教改革を具現化した明治大嘗祭

- ・明治4年11月、大嘗祭斎行。天皇一世一代の大祭に太政官の高官もすべて参列して太政大臣三条実美が祝詞を奏上した。前代の孝明天皇大嘗祭では、天皇神饌供進ののち、吉田家当主が宮主（大嘗祭の指南役）として祝詞を奏上していた。明治

大嘗祭では宮主祝詞奏上を廃し、新たに太政大臣祝詞奏上を定めたのである。まさに祭(天皇) 政(太清大臣) 一致の具現であることを象徴するものであったと言えよう。

5. 神道国教化計画とその挫折→信教の自由「各宗派の布教、勝手たるべし」→神道非宗教化「神道は宗教に非ず」

・明治5年頃になると、政府は不平等条約解消などの外交の場において、条約改定の条件として欧米諸国からキリスト教容認(慶応4年4月、切支丹禁止令公布)を強く求められるようになり、信教の自由を含む国家の近代化政策と復古主義的政策との矛盾が深刻化してきた。さらに地方政府としての機能を残していた藩の儒教・仏教重視感情との対立、神祇省内部の国学者間の路線対立も重なって神道国教化の動きは不振が続き、明治5年3月、神祇省に代わる教部省の下で、再度大教宣布の国民教化のため、神仏分離の方針を転換して仏教各派、一般の有志も参画した神仏連合の教導職の研修組織として大教院が設置され、神仏両派で合同布教にあたることとなった。しかし、当初仏教側のペースで進められていた大教院体制は、大教院に神殿(天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、天照大御神)が設けられたことによって「神主仏徒」の形態を呈するに至り、ことに神祇不拝を伝統とする真宗西本願寺教団からは強い不満が出て、東京の大教院および地方中教院での神仏合同布教に反対した。結局、この真宗教団の主張は政府においても認めるところとなり明治8年5月大教院は解散した。

6. まとめ

・こうして明治初頭のわずか数年間に「津和野派」が中心となって進めた王政復古・祭政一致の宗教改革および明治末期の神社整理はその後の日本の宗教システムに大きな影響ないしは後遺症を残すこととなった。この間の改革に特に大きな影響を与えたのは次の事項あるいは出来事であると考えている。これらの項目については未だにその評価が定まっていないように思われる。本ゼミの報告の要点でもある。

- ① 令制神祇官の再興と神祇氏族(神祇四姓=中臣、忌部、王(白川)、卜部(吉田))の排除
- ② 大国主神の表名合祀に関する祭神論争と天皇勅裁「宮中神霊(賢所、皇霊、天神地祇)、遥拝奉祀スベシ」
- ③ 津和野派による神祇官廃絶と大斎場創建構想

による神祇官祭祀から宮中祭祀への転換

- ④ 古式大嘗祭から明治大嘗祭および皇室祭祀令(登極令)への大嘗祭の改革
アマテラスの復権と造化三神、八神の凋落
以上

ゼミ会場と時間 13:15~16:50

1. 全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
2. JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
3. 会場には12時30分から入場できます。

総本宮:久留米水天宮にまつわる話あれこれ

式 水神と筑後川流域の河童伝説

- 松石 賢治会員記 -

1. はじめに

空想の河童(河伯)伝説は、九州の様々な地方にも話が伝わっているが、久留米水天宮は筑後川河童に因む伝承地の拠点でもある。

実際に見たという実在性の薄い伝説ばなしではあるが、100年はおろか500年(加藤清正)も800年(平清盛)も、あるいは1000年(神功皇后)以上も遡った人物まで河童伝説の中に引きずり込んで、長く語り継がれ言い伝えられてきた。この伝説の息の長さは、この河童の出没場所が水の神様の祭祀場所とほぼ重なり、水神信仰の対象として祭祀され喧伝流布されてきたからであろう。

2. 筑後川流域の河童伝説

①久留米水天宮の河童由来

久留米水天宮の河童伝承は、熊本八代市の【河童渡来の碑】纏わるものだろうか・・・。



この碑は、熊本八代の史跡保存会による口伝に基づいて建てられたもので、ガラッパ石と呼ばれ2個の石でなる。

球磨川の分流前川の徳の淵の堤防のうゑに建立されているが、碑文に曰く「ここは千五六百年前河童が中国方面から初めて日本に来て住み着いたと伝えられる淵である。・・云々」と。また6月の川祭りに子供たちだけが囃し立てる「オレオレデーライタ」がある。

吉嶋華仙氏によれば、「オレオレデーライタ」＝「ウオレンウオレンデライタ」であり、「ウオレンウオレンデライタ」は「呉人呉人的来多」となるという。即ち呉人（中国人）が多数やってきたということになる。上陸したのは「九千坊」という河童の大將が率いる一族郎党であった。

②河童「九千坊」のルーツ

この球磨川の河童「九千坊」を有名にしたのが、『河童会議』を著し河童を愛した作家：火野葦平である。河童「九千坊」のルーツを『久留米市史』では、随筆家：佐藤垢石、作家：火野葦平などの説を紹介している。その説は「チベットの山から黄河を下り、東シナ海を渡り天草から球磨川に棲んだ」というもの。それは、今から1500～1600年前のことであり、魏・蜀・呉の三国争覇の後、長く続いた戦乱に終止符を打った南朝：梁・陳王朝の時代であり、応神天皇～雄略天皇時代に相応する。

③加藤清正の「河童退治」

上陸から1000年以上経たある夏の日、肥後国主：加藤清正の寵愛する小姓が球磨川で溺れて死んだ。清正はてっきり河童の仕業と思い、大いに怒りを買って「河童退治」となった。兩岸から矢・鉄砲・大砲を打ち込む、大きな石を焼いて投げ込む、上流から毒を流すという大変な騒ぎとなった。

「九千坊」始め河童たちは棲むことができず、這々の体で逃げ出した。現在は筑後川が九千坊残党河童の集積地ということである。

また別の話で国学者：谷川土清の『倭訓栞』によると、清正の怒りを買った「九千坊」以下の河童たちはすべて毒殺されようとしたが、僧に請けいれて謝罪し人民には決して危害を加えないことを約束して難を逃れた。そして当時の久留米藩主に命乞いをして、筑後川に棲みつきこの水天宮の守り役をしたという。

※久留米水天宮の河童の掛け軸

久留米水天宮は水難除けにも靈験あらかたなる神社である。この水天宮所蔵のものに「河童の掛け軸」なるものがある。

「我は水天宮の僕使なり世に幸いを願う輩 我象を念ぜよ さらば難を逃れ災いを封じ 福德の利益をや授からむ」とある。

④熊本八代の河童渡来説（伝説）を傍証する資料『久留米藩社方開基』

寛文10年（1670年）、平右忠の16代目で久留米水天宮の創建に係わった神官：平（真木）忠左衛門重臣が書上げた『久留米藩社方開基』という資料は、伝説を傍証するうゑで貴重な資料である。

その資料の山本郡蜷川村の条に「荒五郎大明神」を初めて祀ったとある。

現在は「片淵神社」（祭神：1弥都波売神・荒霊大明神）として鎮座するが、社前の説明板には智僧（知僧）2年、竜宮神が久留米に示現し「荒五郎大明神」として祀り始めたというのである。

知僧は年号制定以前の私年号で、「欽明天皇」時代にあたり560年代後半という。

つまり6世紀半ば、龍神（水神）の精霊である「荒五郎」が久留米で祀られたことになり、熊本八代の【河童渡来の碑】

に刻まれた時代にほぼ符号しているのである。

560年代後半中国においては、2. ②で述べたように南北朝時代の江南地域の梁王朝・陳王朝の時代に相応する。因みに『日本書紀』応神天皇14年、37年、41年、雄略天皇14年の条に「縫衣工女」の渡来が記載されている。即ち5世紀頃機織り技術導入について述べられており、漢織・呉織は久留米の地名発祥ともかかわるとの説もある。



（荒五郎大明神）

3. 山本・浮羽地方の河童たち（河童大明神）

①支流巨瀬川の河童

筑後川の河童の総大将が「九千坊」なら、支流巨瀬川の河童の大将は「巨瀬入道」である。

筑後川の支流巨瀬川（九瀬川）の河畔には河童を祀る神社が多く点在している。耳納山麓を流れる巨瀬川は水運に便利な川であり、「庄前神社」が鎮座する大橋村常持は筑後川と巨瀬川の合流地であり、古くから両河岸を上下する船の離合する交通の要所であった。主な水神社を挙げると次のとおり。

- ・智僧2年（567年）、荒霊大明神（荒霊宮：山本郡蜷川村→片淵神社：竹野郡田主丸村）
- ・建久3年（1221年）、庄前大明神（九瀬宮：山本郡矢作村→御井郡大橋村：庄前神社）
- ・大宝年間（701年～）、九十瀬入道（九十瀬水神社→高西郷水天宮：浮羽郡妹川村檜ヶ平）
- ※寛文（1661年）久留米藩の令により取潰し→昭和36年（1961年）再建
- ・その他、馬場瀬宮・河童大明神等がある。

②二匹の河童の逢瀬（古老の言い伝え）

寛文11年（1671年）『筑後州山本郡九瀬宮庄大明神之記』によれば、主祭神は罔象女命で、「平清盛」と「二位尼（安徳帝を抱く二位尼）」を随神としている。「巨瀬入道」とは、「庄前神社」の祭神で「平清盛」の霊を祀っている。一方久留米水天宮では、継室「二位尼」が祀られている。古老の言い伝えでは、二人の化身である河童が逢瀬するときは、川は大荒れして堤防が決壊し、洪水をもたらすという。

またこんなとき川で泳ぐと二人の仲を邪魔するものとして水難に会うとされている。

③「平清盛」と「二位尼」が河童の化身に・・・？

前記寛文10年（1670年）『久留米藩社方開基』では、祀神は男神像1体（弓箭の守護神牛馬の祈祷神）であったのが、寛文11年（1671年）の『九瀬宮庄前大明神記』には不思議なことに4体の神像に増えている。「罔象女命を中尊として相殿に安徳天皇並びに相国清盛公・二位尼公ともに四躰の神霊」。何らかの事由で「尼御前社」の神像3体を合祀したのである。即ち本来の男神像を安徳天皇とし、「尼御前社」の「尼御前・荒五郎・安坊」の三明神をそれぞれ「罔象女命・平清盛・

二位尼」に見立てたらしい。

④なぜ祭神が入れ替わったのか

文龜2年（1503年）豊前下毛郡の亀岡神社：筑後国音楽縁起によれば、平家・河童・筑後楽がつながって、筑後楽が千代・中村から始まったという。

千代・中村は現在の北野天満宮あたりを指すとみられ、高良山の永勝寺を拠り所とした「地神盲僧」が琵琶を片手に平家伝説を語り広めた。また高良山で管理されていた千代・中村の巫覡「尼御前」、鷺野原に居ついた巫覡「尼御前」や大分郡夜明：朝日寺の巫女たちも筑後川筋の水神祭場を巡りながら「水霊鎮魂」を中心に語り広めながら「五文字」の神符を配り、怨霊慰撫と善導寺の唱導に導かれ筑後版「平家物語」を語ったと思われる。

4. 河童「九千坊」のもたらしたもの

串山弘助氏によると『九州河童紀行』の中で河童「九千坊」らは、次の様々な思想・文化・技術をもたらしたと述べている。

◆信仰と思想・・北辰信仰と水神信仰及び

思想は呉の太伯の流れをくむ思想

- ◆漁労技術、航海技術、造船技術
- ◆工芸、文物、織物技術
- ◆農業技術や知識

<参考文献>

1. 久留米市史
2. 日本の神々 谷川健一 白水社
3. 会期の民俗学3 河童 小松和彦 河出書房新書
4. 週刊日本の神社117 小河原和世
5. フリー百科事典「ウィキペディア」水天宮
6. 「知るっば！久留米」 YouTube

以上

投稿文を募集します

会員の皆さんのニュースへの投稿文を募集します。初めての方も大歓迎です。どうぞ、遠慮なく投稿して下さい。

次回7月6日ゼミ・テーマ

歴史人口学一頁 康男会員一

10月ゼミの日にか変更のお知らせ

10月ゼミも会場の都合で、5日(土)から6日(日)に変更になりました。以上。

